

人の死と死後

[その二]

~ カトリックの教えによる人生の展望 ~

The Human Death and Post-mortem

[Part 2]

~ The Vision of Catholic Anthropology ~

霧 島 怜

Rei S. Kirishima

目 次

1. キリストが対面した死と死後界
2. キリストによる人の死と死後界の理解
3. 使徒教会による人の死と死後界の理解

註

カトリックの教えによる人の死と死後

1. キリストが対面した死と死後界

マテオ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書と使徒行録はイエズス・キリストが生涯を通じて切に望み、教え、行い、証したこと（教行証）を集録し、キリストが示した「人間」、特に「人生」、「死」と「死後界」の理想を紛れもなく、誠実に伝えている。キリストは、自分の養父ヨゼフの苦勞と死を初め、大勢の人々の極貧、搾取、窮苦と死を目撃したに違いないが、福音書はその一部しか伝録していない。その内に極めて重要で意味深く、キリストの心奥を現し、死と死後界の理解を明示する言行の一面とその雰囲気をも福音書の言葉を借りて描写する。

ユダヤ人を愛し、隣人には親切であったローマ軍の百人隊長の部下を治したキリストは弟子達と彼らについて来た大勢の人々と共にナインという町へ向かった。

『イエズスは町の門に近づかれると、担ぎ出されてくる死人にであった。それが一人息子で、その母親は寡婦であった。…寡婦を見て慇懃に思われた主は、「泣くではない」と言い、棺に近づいて手で触れられたので、担ぐ人々は足をとめた。イエズスは、「若者よ、私は言う、起きよ」

と言われた。すると、死人は起き上り、ものを言い始めた。イエズスは息子を母親に渡された。人々は恐れ、神^{*}を崇めた』(ルカ, 7: 11-17)。

また、別の日に、汚れた霊に憑かれ、極めて重い精神病を煩い、夜となく昼となくゲラザという村の墓地や山で叫びたて、鎖で縛られてもこれを引きちぎり、自分の体を石で傷つけていた男を癒したキリストは弟子達を連れてデカポリス地方で福音を宣べ始めた。湖の辺に居られた時、

『会堂の司であるヤイロはイエズスの足下に平伏し、「私の小さい娘が死にかけています。あの子が治って助かるように、家へ来て、あなたの手をおいて下さい」と切に願った。イエズスは弟子達を連れて、その司と共に行かれた。…司の家から人が来て、「お嬢様は亡くなられました。…」と言いました。…司の家に着くと、イエズスは…中に入り、「何を泣き騒いでいるのか。子どもは死んだのではない。眠っているのだ」と言われた。人々は彼を嘲笑った。イエズスはその人達を皆外に出し、両親と自分の供だけを連れて、子どものいる部屋に入り、子どもの手を取り、「タリタ・タム」(「娘よ、私は命じる、起きよ」)と言われた。すると娘は起きて歩き出した。…イエズスは、このことを誰にも知らせるなどかたく彼らを戒めた』(マルコ, 5: 22-44; マテオ, 9: 18-26; ルカ, 8: 40-56)。

エルサレム都の郊外にあったベタニア村でマルタとマリアという姉妹と共に暮らしたラザロは、キリストと弟子達の親友であり、宣教活動の合間に、彼らに憩いの場を提供していた。キリストは、エルサレムで三度目の過越祭を祝うために、弟子達と共に都へ向かう途中でラザロの急死が彼に伝わった。キリストがラザロの家に着いた時には彼の葬儀は終わって四日間も経っていた。福音書はラザロの甦りの奇跡をこう物語っている。

『マルタはイエズスが着かれたと知って迎えに行き、「主よ、もしあなたがここにましましたら、私の弟は死ななかつたでしょう。けれども、今でも私は、あなたが神にお願いになることは何でも神が与えて下さる事を知っています」と言った。イエズスは、「あなたの弟は甦るであろう」と言われた。マルタは、「彼(ラザロ)も終わりの日、復活の時に甦る事を知っています」と言った。イエズスが、「私は復活であり、命である。私を信じる者は死んでも生きる。…」と言われると、彼女は、「そうです、主よあなたはこの世に来るべき御方、神の子キリストであることを信じます」と言った。…「彼をどこに納めたか」とイエズスは言われた。…イエズスは涙を流され、…「石を取り除けなさい」と言われた。マルタは「主よ、四日も経っていますから臭くなっています」と言ったが、イエズスは、「もしあなたが信じるなら、神の栄光を見るだろうと言ったのではないか」と言われた。(墓の入り口を閉ざしていた巨大な)石は取り除かれた。イエズスは目を上げて話された、「父よ、…私はあなたが常に私の願いを聞き入れて下さることをよく知っています。私はこう言いますのはこの周りにいる人々のため、あなたが私を遣わされたことをこの人達に信じさせるためであります」。そう言って後、声高く「ラザロ、外に出なさい」と呼ばれた。すると、死者は手と足を布で巻かれ顔を汗拭きで包まれたまま出て来た。…イエズスがされたことを見た多くのユダヤ人は彼を信じた』(ヨハネ, 11: 21-45)⁽³³⁾。

別の時にキリストはガリラヤ各地を訪れ、唯一神の福音を伝えながら社会的な弱者、差別を受けていたり、搾取されていた人々の身と心の病を治癒し、無償な愛を持って数多い慈善的な奇跡を行なった。名声の頂点に近づいた中、称讃、名誉と栄光に酔った弟子達に向かってキリストは突然自分の死をこう予告した。

『「人の子 [キリスト] は人々の手に渡され、殺される。そして三日目によみがえる」と』(マテオ, 17. 22-23)。

そして弟子達と共にエルサレムへ三度目に上っていた時に、十二人の弟子達だけを呼び寄せてこう言った。

『我々はエルサレムに上る。人の子は司祭長と律法学者達に渡される。彼らは人の子に死を宣告し、異邦人に渡し、嘲弄させ、鞭打たせ、十字架につけるけれども、彼は三日目によみがえる』(マテオ, 20. 17-19)⁽³⁴⁾。

キリストは最後の晩餐会の席で弟子達の足を洗い、唯一の神とその御独り子への敬愛を軸とする社会の新しい秩序と自他の永遠真福へ導く道としての「相互誠愛」(「私があなた達を愛したようにお互いに愛し合いなさい」)を強く薦めた。さらに、自分が教行証してきた愛神愛人の道を歩む信奉者の迫害、世間による憎しみと来生永福の獲得を予告し、父なる神からの「真理の霊」の派遣を約束した。一方、拒神拒愛又は自己中心の道を歩み、それを誇りとして生きる者達に、神の恵愛を伴わない永遠禍苦の来生を警告した。そしてキリストは弟子達、その信奉者と自分のために神に祈った後、晩餐会の頂点として自分の死の意味、価値と役割について語り、永福と地上において自分との一致の至聖な秘跡(‘Eucharistia’, ミサ)を制定した。

『食事の間イエズスはパンを取り、祝し、裂き、これを弟子達に与えて言われた、「取って食べよ、これは私の体である」。又、杯を取り、感謝し、彼らに与えて言われた、「皆、この杯から飲め。これは多くの人々のために、罪の赦しを得させるために流す〔新〕契約の私の血である。』(マテオ, 26. 26-29; マルコ, 14. 22-25; ルカ, 22. 15-20)⁽³⁵⁾。

最後の晩餐会を終え、自分の人笥の最高の目的であった「愛神愛人の教行証」の決定的な時点、「愛神愛人の無上証明」、即ち逮捕、人々の嘲弄、不公平な裁判、十字架の道と死を目前にしたキリストは心の動揺を鎮めるためと父なる神の御旨を再確認するために十一人の弟子達を連れて、「葡萄の園」へ向かったのである。福音書は父と対談するキリストの姿をこう描いている。

『イエズスは、「私が祈る間ここに座って待て」と弟子達に命じ、ペトロ、ヤコボとヨハネを連れて〔園の奥に〕行かれた。イエズスは激しい恐れと悩みに打ち沈み、「私の魂は死ななばかりに悲しむ。あなた達はここにいて目を覚まして待て」と言われ、少し進んで地に平伏し、…「アッバ、父よ、あなたには何でもお出来になります。〔飲むべき〕この〔死の〕杯を私より遠ざけて下さい。とは言え、私の思いのままではなく、あなたの御旨のままに」と言われた。…イエズスは〔眠っていた三人の弟子達の所に〕三度目に立ち戻った時、…「さあ、立って行こう。私

を売ろうとする者は近づいた」と言われた。…〔弟子の一人であった〕ユダは着くとすぐイエズスの所に行き「先生」と言っ、口付けた。…〔キリストは自分を捕えるために来た司祭長ら他の〕人々に向い、「あなた達は強盗に立ち向かうように、剣と棒を持って私を捕えに来たのか。私は毎日神殿で人々の中に立って教えていたのに、その時には捕えようとしなかった。だがこうなるのは聖書〔にキリストの死について記されたこと〕の実現である」と言われた。…人々はイエズスを大司祭の所に引いて行った』（マルコ, 14. 32-53 ; マテオ, 26. 36-56 ; ルカ, 22. 39-53 ; ヨハネ, 18. 1-11)⁽³⁶⁾。

キリストを手渡す身代金として「銀貨三十枚」を大司祭から受け取ったユダは罪の全くない人、自分の恩師を死に渡したことに気づき、大司祭らに助けを求めが、彼らに無視され見捨てられ、良心の呵責に耐えられなかった挙げ句に自殺した。福音書はこの禍死をこう伝える。

『裏切り者のユダはイエズスへの判決を聞いて後悔し、司祭長と長老達にあの三十枚の銀貨を返し、「私は罪なき者の血を売って罪を犯した」と言った。彼らは、「それがどうした、我々には関わりがない、お前自身の問題だ」と答えた。ユダはその銀貨を神殿に投げ捨てて去り、自ら首をくくって死んだ』（マテオ, 27. 3-5)⁽³⁷⁾。

真の唯一神を拜む真の宗教の最高機関から死の宣告を受け、最高の信頼を寄せたペトロによって否認され、非道の王ヘロデから嘲弄され、権力にしがみ付いた傲慢なローマ総督ピラトによって死の判決を受けたキリストは十字架を背負いゴルゴタ・髑^{されこべ}の丘に辿り着いた。十字架につけられたキリストが自分の死を前にして発した最後の言葉を福音書はこう伝えている。

『されこうべという所に着くと、イエズスを十字架につけ、悪人の一人を右に、一人を左につけた。イエズスは、「父よ、彼らをお赦し下さい。彼らは何をしているか知らないからです」と言われた。頭達〔司祭長他〕は「この男は他人を救った。もし神の子キリスト、選ばれた者なら自分を救え」と言った。兵卒達も彼を嘲弄し…もしユダヤの王なら自分で自分を救え』と行った。…十字架につけられた悪人の一人はイエズスに…悪口を浴びせたが、もう一人は彼を押し止め、…「イエズスよ、あなたが〔天国の〕王位を受けて来られる時、私を思い出して下さい」と言った。イエズスは、「真に私は言う。今日、あなたは私と共に天国にいるであろう」と言われた。昼の十二時頃、太陽は光を失い、三時頃まで地上一帯が暗くなった。神殿の幕は真中から二つに裂けた。イエズスは、「父よ、私の霊を御手にゆだねます」と大声で叫ばれた。そしてそう言いながら息は絶えた。この出来事を見た〔ローマ軍の〕百人隊長は神を崇め、「本当にこの人は義人だった」と言った』（ルカ, 23. 33-47 ; マテオ, 27. 31-56 ; マルコ, 15. 20-47 ; ヨハネ, 19. 17-42)⁽³⁸⁾。

さらに、福音書の四伝は揃って三日目の日曜日朝の出来事をこう語る。

『週のはじめの日の朝早く婦人達は整えた香料を持って〔イエズスの遺体が納められた〕墓へ行った。すると石が墓から転がしてあるのを見たので、中に入ると主イエズスのお体が見つからなかった。狼狽していると、光り輝く服をつけた二人の人が現れた。…二人は言った、「なぜ生

きる御方を死者の中に探しているのか。主はここにおられない。よみがえられた。…主は《人の子は罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目によみがえらねばならぬ》と仰せられた。婦人達は…これらのことを十一人と〔彼らと共に集まっていた〕他の総ての人々に告げた。…弟子達は彼女達の言うことを信じなかったが、ペトロは立って墓に走って行った。身をかがめてみると布きれだけしかなかったので彼は出来事に驚きながら家に帰った。…これらのことを話し合っている時、イエズスは彼らの中に立ち、「あなた達に平和」と言われたので彼らは驚き恐れ、幽霊を見ていると思ったが、イエズスは言われた、「なぜ心に疑いを起こすのか。私の手と足を見よ。私自身だ。触れて確かめよ。…」』(ルカ, 24. 1-53; マテオ, 28. 1-20; マルコ, 16. 1-20; ヨハネ, 20と21章)⁽³⁹⁾。

ユダヤ教の権力者とローマの総督を恐れ、弟子達と一緒に隠れ集まって来た友人だけではなく、ユダヤ教の最高機関、その最高権威者とキリストの墓を厳重に見張り、夜も昼も番していたローマの兵士達もキリストの復活に驚き、畏怖の念を起こしたのである。福音書はこのことをこう伝えている。

『明くる日〔土曜日〕、…司祭長とファリサイ人はピラトのもとに来て言った、「主よ、我々は思い出したのですが、あの惑わし者〔つまり、キリスト〕が生きていた時に、《私は三日後に甦る》と断言していました。ですから三日間墓を見張れと命じて下さい…」。ピラトは、「番兵をやるから、好きなように守るがよい」と言った。そこで彼らは〔キリストの遺体を納めた墓への入り口を閉ざしていた〕石に封印し、番兵をつけて墓を守り固めた。…婦人達が去ると数人の番兵がエルサレムに行って起こったことを司祭長達に告げた。司祭長達が長老と集まって協議し、兵卒達に多くのお金を与えて言い含めた、「『あの男の弟子達が夜中に来て我々の眠っている間に屍を盗んで行った』と言え。これがもし総督の耳に入っても我々が宥めてお前達には迷惑をかけぬ」。兵卒達はお金を貰って、言い含められた通りにしたのでこの話はユダヤ人の間に言い広められ今日に至っている』(マテオ, 27. 62-66, 28. 11-15)⁽⁴⁰⁾。

しかし、復活したイエズス・キリストは母マリア、すべての弟子達、500人以上の知人と数年後にパウロ以外に自分の新しい存在様態とその姿を表わすことはなかった。キリストは復活の後四十日の間で弟子達に頻りに現れ、彼らの信仰を強めながら使命を与え、全人類の永遠禍福に関わる極めて重要な教訓を伝えている。そして、キリストはこの世を去って父である神のところへ昇ったが、神しか知らない、世の完成と同時に終末の日に人間一人一人が生前で自由な意志を持って選び行なったあらゆる正邪と善悪を全人類の面前で明かにし、一人一人の生き方の収穫と最適な報いを最終的に確定するために再臨すると約束した。キリストが昇天の日に弟子達、彼らの信奉者と全人類に残した最後の言葉を福音書は次のように記する。

『ガラリヤで…イエズスは次のように仰せになった。「私には天においても地においても全ての権能が与えられている。だから、あなた達は行って全ての国の人々を弟子としなさい。父と子と聖霊のみ名によって洗礼を彼らに授け、私があなた達に命じたことを全てを守るように教えな

さい。私は世の終わるまで、いつもあなた達と共にいるのである。』(マテオ, 28. 16-20)。

『信じて洗礼を受ける者は救われ、信じない者は滅ぼされるであろう』(マルコ, 16. 15-17)。

『父が私をお遣わしになったように私もあなた達を遣わす。…あなた達が赦せば、誰の罪でも赦され、赦さないで留めておけば赦されないままに残る』(ヨハネ, 20. 21-23)。

『話し終えたイエズスは彼らの見ている前で天に上げられ、ひとむらの雲が弟子達の目から彼を覆い隠した。…彼らが天を見つめていると、二人の白衣の人が現れて言った。「ガリラヤ人よ、…今あなた達を離れて天に昇られたあのイエズスは、…又そのようにして来られるであろう』(使徒行録, 1. 3-11)⁽⁴¹⁾。

2. キリストによる死と死後界の理解

キリストの最高で普遍的な教権と万代万人の死後の禍福を判定する権利は三位一体的唯一神の無上無礙で絶対的な君臨権と決定権、神の100%自由で無償の恵愛に由来する人類救済の計画、父なる神に対するキリストの全面的な従順とキリストの贖罪的な人甞を本源とするものである。

キリストは地上においても天においても、神の絶対で永遠の主権に随従する自分の支配権、特に人類の永遠禍福を判定する権利を主張し、その根拠として次のような事実をあげている。先ず、神は自分の独り子であるキリストをこの世に派遣したのは暴君の様にこの世を独裁し、自ら実践しない綺麗事と地上の楽園を約束しながら弱者を搾取し、その人権を踏みにじるためではなく、人類を愛し、その罪悪がもたらす永遠の禍苦から開放し、悔い改める者に永福参加を恵むためである。次に、キリストは一生を通じて父なる神の御旨を行ない、特に自らの死によって万人の諸罪を贖償し、人類を神と和解させる事によって神の永福への参加を可能とした。そして、神はキリストを復活させ、天においても地においても彼に全権を与え、人類の永遠禍福を決定する権利を譲渡した。キリストはこれらのことについてこう語っている。

『神は御独り子を与え給うほどこの世を愛された。それは彼を信じる人々が皆滅びることなく、永遠〔で最高に幸せな〕命を受けるためである。神が御子を世に送られたのは世を裁くためではなく、世を救うためである。御子を信じる人は裁かれぬが、信じぬ者は、神の御独り子の名を信じなかったがために、すでに裁かれている』(ヨハネ, 3. 16-18)。

『イエズスはこう仰せられた、「真に真に私は言う。…父は子を愛し、御自分のされる事を皆子に示し、あなた達が驚くほどの、それよりもっと偉大な事を示される。父が死者を復活させて〔永遠の〕命を与え給うように子も又自分の望む者達に〔永遠の〕命を与える。父は審判をされず、子に審判の事を全く任せられた。それは父を尊ぶのと同じように人々に子を尊ばせるためである。子を尊ばぬ者は、子を遣わされた父をも尊ばぬ。真に真に私は言う。私の言葉を聞き、私を遣わされたお方を信じる者は永遠の命を受け、審判もされず、すでに死から命へと移っている。…父は子を最高の審判者と定められた。彼は〔三位一体の第二の神位的人格化として〕人の子だからである。こう聞いて驚いてはならぬ。墓にいる人々が皆その御声の呼びかけを聞き、墓を出る時が来る。善を行なった人々は〔永遠で至福の〕命のために、悪を行なった人は永遠の罰のため

めに甦る。…私は〔父から〕聞いたことに基づいて裁く。私の裁きは正しい。私は自分の望むことを求めず、私を遣わされたお方の御旨を求めるからである』(ヨハネ, 5. 19-30)。

『イエズスは言われた、「私は道であり、真理であり、命である。私によらずには誰ひとり父の御もとには行けない。…私を見た人は父をみた。…私が父におり父は私にまします事をあなた達は信じないのか。…私を信じよ、私は父におり、父は私にまします。せめてそれを私の業によって信じよ』(ヨハネ, 14. 6-11)。

そして、昇天の日、天に昇る直前にキリストはこう言われた。

『私には天と地の一切の権威が与えられている。行け、諸国の民に教え、聖父と聖子と聖霊の名によって洗礼を授け、私が命じたことを全て守るように教えよ』(マテオ, 28. 18-20)。

『信じて洗礼を受ける者は救われ、信じない者は滅ぼされる』(マルコ, 16. 16)⁽⁴²⁾。

超越神の教えを軽んじ、自他の永遠真福を心にかけるよりも全身全霊を尽して富、権力、名誉と娯楽等のような一時的で世俗的な価値を最優先し、それを貪り、心の拠り所と幸せの基盤とする人々、又自分はまだ若く死も遠いと思い、自己中心で私利私欲を追求する者にキリストは次のような警告を発する。

『ある金持ちがいた。畑が豊かに実ったので、彼は心の中で、「今の小さい倉を壊してもっと大きいのを建て、そこに穀物と財産を皆納めよ。そして自分の魂に向かって言おう。魂よ、お前はもうこれから長い年月を過ごせる多くの財を蓄えたから、休め、飲め、食べよ、楽しめ」と言った。ところが神はその人に、「愚かな者よ、お前の魂が今晚〔この世から〕呼び戻されるのだ。そうするとお前の蓄えたものは誰のものになるのか」と仰せられた。自分の〔私利私欲を充たす〕ために財を積んでも神のために財を積まぬ者はこの金持ちと同じである』(ルカ, 12. 16-21)⁽⁴³⁾。

そしてクリスチャン、修道女、司祭、司教、主司教や枢機卿になり、自分は必ず天国でキリストとの晩餐会が確約されていると思い込み、クリスチャンの本分とその使命よりも世俗的で一時的な価値を最優先して人生を楽しみ、死の準備を怠る者にキリストはこう警告する。

『天の国は、…花婿を迎えに出る十人の乙女に喩えてよい。…愚か者は燈を持ったが油を持たず、賢い方は燈と一緒に器に入れた油も持っていた。花婿が遅かったので、一同は…眠り込んでしまった。夜半に、「さあ、花婿だ。出迎えよ」と声がかかった。乙女達は皆起きて、…愚かな方は賢い方に、「油を分けて下さい。火が消えかかっていますので」と言った。賢い方は、「皆にはおそらく足りません。商人の所へ行って買っていらっしゃい」と答えた。彼女達は買いに行っている間に花婿が来たので、用意していた乙女達は一緒に宴会に入り、そして戸は閉ざされた。他の五人も帰ってきて、「主よ、主よ、どうぞ開けて下さい」と言ったけれども、「真に私は言う。私はお前達を知らぬ」と〔花婿、つまりキリストは〕答えられた。警告せよ、あなた達は〔死ぬ〕その日その時を知らない』(マテオ, 25. 1-13)⁽⁴⁴⁾。

人類の歴史においてあらゆる時代に見られるが、特に最近、聖俗両界の「人間本位主義」を人生の生き甲斐とする「新時代運動の信奉者」[*New Agers*] は人間の現世においても正邪、善悪や真偽の区別を否認し、死後の来生においても今生の正邪、善悪や真偽の生き方に対して正邪、善悪や真偽の成果、つまり報酬（自業の自得）もなく、善人も悪人も、愛神愛人を生きた者も拒神主義者や無神論者も、凶悪の加害者も被害者も、極貧の者も億万長者も、戦犯者も慈善行者も「皆平等」に喩えのない神の慈愛に包まれて、最終的に「天国」の栄光とその境遇を獲得するという耳に優しいが途も轍もない勝手気まま主義を提唱する。しかし、キリストはやはり死後の永福、又は永禍のことを明確に教えている。つまり、全身全霊を尽して「愛神愛人」の道を生きようとする人々に神の恵愛、善智、歓喜等に溢れる永福参加の死後（天国）を確約する。一方、如何なる人物、私利私欲、財宝、権力や名誉等を絶対視したり、神聖化したり、神格化したり、又はそれらを不可侵的な価値と見做したり、自他人生の最高無比の目的や生き甲斐としたりして「正しい愛神愛人」の道に背いて生きていた者達にキリストは神の名において、神の恵愛とそれに伴う慶福を欠く永遠禍苦の境遇（地獄・永遠の罰）を警告する。禍福的な死後の運命をわけるのは「愛人」的と自己本位的や抽象的な「信仰」と無宗教的な生き方だけではなく、先ず「愛神愛人」的と拒神的、軽神主義的、そして邪正と善悪を無視する勝手気ままの生き方である。人間の禍福的な運命とその決定についてキリストは昔も今の我々にもこう語る。

『私には天と地の一切の権威が与えられている。行け、諸国の民に教え、聖父と聖子と聖霊の名によって洗礼を受け、私が命じたことを全て守るように教えよ』（マテオ、28.18-20）。

『信じて洗礼を受ける者は救われ、信じない者は滅ぼされる』（マルコ、16.16）。

『真に真に私は言う。私の言葉を聞き、私を遣わされたお方を信じる者は永遠の命を受ける。…こう聞いて驚いてはならぬ。墓にいる人々が皆その御声の呼びかけを聞き、墓を出る時が来る。善を行なった人々は〔永遠で至福の〕命のために、悪を行なった人は永遠の罰のために甦る』（ヨハネ、5.19-30）。

『「すべての掟のうちで、どれが第一の掟ですか」。イエズスはお答えになった。「第一の掟はこれである。イスラエル〔および万国万民〕よ、聞け。我らの神である主は唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの〔創造者である〕主を愛せよ。第二の掟は、隣人をあなた自身のように愛せよ」と。この二つの掟よりは大事な掟はない』（マルコ、12.28-31；マテオ、22.34-40；ルカ、10.25-28）⁽⁴⁵⁾。

又ある時、キリストは隣人の極貧にもその苦しみにも無関心、神にも死後の生命にも興味がなく、永遠の天国も永遠の地獄（禍苦）も認めず、真理も偽りも弁えず、正善と邪悪果報法も軽んじ、自己中心で自己本位的に生きる者たちに「死者は甦って、死後界の幸不幸、苦楽と賞罰のことを語ったとしても」信じないだろうと語られたことがある。キリストはこのような人々に人間生命の死後、神の正義、生前の善悪と死後の果報、今生における隣人愛と死後賞罰との依存関係、天国の聖性とその慶福、地獄の禍苦、天国と地獄の違い、その永遠性と現実性についてこう話している。

『緋色布や亜麻布を着て日々おごり暮らすある金持ちがいた。又ラザロという貧乏人がいた。

全身腫れ物にうみだれた彼は、金持ちの門前に横たわって、その食卓の残飯で飢えをしのぎたいと思っていた。その上、犬が寄って来て彼の腫れ物をなめていた。この貧乏人が死んだ時天使達に連れられ、アブラハムのふところ〔天国〕に入った。金持ちも死んで葬られた。死人の国へ行った彼は苦しみの中から目をあげ、アブラハムとそのふところにいるラザロを遙かに眺め、「父アブラハムよ、私を憐れみ、ラザロを送って下さい。私は炎の中で悶え苦しんでいます。彼の指先を水にぬらして、私の舌を冷やさせて下さい」と叫んだ。だが、アブラハムは、「子よ、あなたは生きている間に良いものを受け、ラザロは悪いものを受けていたのを思い出せ。今、彼はここで慰めを受け、あなたは悶え苦しんでいる。そればかりか、私達とあなた達の間には大きな淵があって、ここからあなた達の方に渡れず、そちからこちらに来ることも出来ぬようになっている」と答えた。すると金持ちは又、「それなら、父〔アブラハム〕よ、お願いですから、私の父の家にラザロを送って下さい。私には五人の兄弟がいます。彼らもこの苦しい場所に来ないように戒めて下さい」と言った。アブラハムは、「彼らにはモーゼと預言者〔が伝えた教え〕がある。それに聞けばよい」と答えた。金持ちは、「いえ、父アブラハムよ、もし死者の中から誰かが兄弟達の所に行けば、彼らは悔い改めるであろう」と言ったが、アブラハムは、「モーゼと預言者に従わないなら、死者の中から甦る人がいても、彼らは聞き入れない」と答えた』(ルカ、16. 19-31)⁽⁴⁶⁾。

又別の折に、一切の世界万物の究極的な創造主と君臨主である神しか知らない時に訪れる「世の終わり」、「愛神愛人」の生き方を規準とする全人類の公審判、各人の永遠禍福の最終的な判定とその永遠不退転性、人屍最高の宝である天国の永福又はその反対である永禍の有り様、死後の永福又は永禍の自選、神とキリストの恵愛を受け入れて答える自由と神およびキリストを拒んでその恵愛を無視する自由、「愛神愛人」を生きて永福を獲得する自由と愛神愛人の道に逆らって永遠の不幸、その苦しみと絶望を選ぶ自由、唯一神と義人の栄光公現又は神の恵愛のない永禍的境遇の公現についてキリストはこう語っている。

『人の子〔キリスト〕はその栄光の内に、多くの天使を引き連れて〔世の終わりに全人類を審判するために来て〕栄光の座に着く。そして諸国の人々を前に集める。…その時王〔キリスト〕は右にいる人々に向かって、「父に祝された者よ、来て、世の始めからあなた達に備えられていた〔天〕国を受けよ。あなた達は私が飢えていた時に食べさせ、渴いていた時に飲ませ、旅にいた時に宿らせ、裸だった時に服をくれ、病気だった時に見舞い、牢にいた時に訪れてくれた」と言う。すると義人達は答えて「主よ、いつ私達はあなたの飢えている時、…渴いている時、…旅をする時、…裸であった時、…病気であった時、…や牢屋にいた時を見て助けてあげたのでしょうか」と言う。王は答える、「真に私は言う。あなた達が私の兄妹であるこれらの小さな人々の一人にしたことは、つまり私にしてくれたことである」。又王は左にいる人々に向かって言う、「呪われた者よ、私を離れて悪魔とその使い達のために備えられた永遠の火〔苦獄〕に入れ。あなた達は私が飢えていた時に食べさせず、渴いていた時に飲ませず、旅にいた時に宿を貸さず、裸だった時に服を与えず、病気だった時に、牢にいた時に訪れてくれなかった」。その時〔私利

私欲を追求していた] 彼らは言う、「主よ、あなたが飢え、…渇き、…旅をし、…裸であり、…病気であり、…や牢屋におられた時、いつ私達が助けませんでしたか」。王は言う、「真に私は言う。これらの小さな人々の一人にしなかったことは、つまり私にしてくれなかったことだ」。そして、これらの人々は永遠の刑罰を受け、義人は永遠の生命に入るであろう』(マテオ, 25.31-46)。

『イエズスにある人が「主よ、救われる人は少ないのですか」と尋ねたので、イエズスは人々に答えられた。「狭い門から入るように努力せよ、…」(ルカ, 13.22-25)。「[永遠の] 滅びに行く道は広く大きくそこを通る人は多い。しかし [永遠の] 命 [の慶福] に至る門は狭く、その道は細く、それを見つける人も少ない』(マテオ, 7.13-14)。

『イエズスは天の国は自分の子のために婚宴を催す王のようである [と語られた]。婚宴への招待者を迎えるために王は下男達を送ったが、彼らは来ようとしなかった。又他の下男を送り、「私は婚宴の準備をすでに整え、…婚宴に来るようにと招待者達に言え」と命じた。ところが、人々(招待者達)はそれを気にもかけず、一人は自分の畑に、一人は商売に行ってしまった。また他の人は下男を捕えて辱しめ、しかも殺してしまったので王は怒って…その人殺しを滅ぼし、町を焼き払ってしまった。それから下男達に、…「大路に行ってお会いする人を皆宴会に招いて来るように」と命じた。…宴席は客でいっぱいになった。客を見ようとして入って来た王は一人が礼服を着けていないので、「友よ、あなたはどのようにして礼服を着けずにここに入ったのですか」と聞いたが、その人は答えなかった。王は給仕達に、「この男の手足を縛って外の闇に投げ出せ。そこには嘆きと歯ざしりがある」と言った』(マテオ, 22.1-14; ルカ, 14.15-24)。

又キリストは『「天の国は畑に隠されている宝のようである [と異なる譬え話を持って説明された]。宝を見出した者はそれを隠して大喜びで去り、持ち物を全部売ってその畑を買う。…又、天の国は海に投げられて、いろいろなものを拾い上げる網に似ている。それがいっぱいになると漁師は岸に引き上げ、座って良いものを籠に入れ、役にたたないものを捨てる。世の終わりにもそうなる。天使達が現れ、義人と悪人を分け、悪人を燃え盛るかまどに投入れる。そこには嘆きと歯ざしりがある。私の言ったことが解かったか」と [イエズスは] 言われると、弟子達は「はい」と答えた』(マテオ, 13.44-50)⁽⁴⁷⁾。

キリストは自分の全人筈、特に十字架上の死を通して万代万人の罪を贖い、その罪科を賠償したことによって全人類を救い、神と和解させたことによって人類唯一の贖罪主と見なされている。しかし、個人の最終的な救済(死後永福の獲得)は無意識的で自動的なものでなければ、「自動販売機的」や強制的なものではない。神の無償恵愛とその御計らいによるこの救いは人間一人一人の自由な承諾、自由な選択と自由で全身全霊の取り組みを軸とする愛神愛人の生き方が欠かせないものである。創造主たる神は人間各自に自由意志と自由決行力を与えた以上、それを永遠を通じて尊重し、誰をも強制的に不幸にしたり、強いて永遠神福に参加させたりはしない。キリストも正伝のキリスト教も同様である。しかし、キリストは言うように、『人は [本来相反する] 二人の主人 [真の神と「マンモン」つまり、現象界的な価値や神格化された被造物] に仕える事は出来ぬ。一方を憎んでもう一方を愛するか』(ルカ, 16.13) である。「愛神愛人」の道に心身を投じて生きるか、

「愛神愛人」の道に反して生きるか。キリストとその教えを愛するか、又はキリストとその教えを軽視したり、拒んだりするか、どちらかである。ここは選者択一しかないが、選ぶのも従うのも100%の自由が永遠に保証されている。しかし、自ら選定した生き方は死後もなお自然で必然的な結果、すなわち神とキリストの永福に参加する、又は神とキリストの恵愛を欠く永遠の後悔、心の呵責、尽きることのない絶望と悪徳生活の果報である様々な苦しみをもたらすので（自業の自得）ある。神とキリストとの永遠至福に参加する事が出来るために自己中心的な愛、派閥的な慈愛、気まま本位的な性愛や悪との妥協ではなく、キリストが教えた総ての真理を認め、誠心誠意を持ってそれらの実践に励む以外の道はない。

主として、個人の永遠禍福を分けるのは神とキリストの公認、又はその否認である。キリストを愛するか、反キリスト者に従うか。唯一の神、それとも唯一神以外の被造物（人、富、名声、権力、私利私欲等）を人生の中心において絶対視するか。愛神愛人の生き方、それとも自己本位的な生き方の中で自他の幸せを追求するか。謝罪、罪の赦しと和解、それとも憎しみと復讐の応戦に力を尽くすか。キリストが設定した「秘跡」（特にミサ）に参加（*participatio in sacris*）し、心の糧とするか、それともこれを迷信として排斥するか。この世で最愛のキリストとの出会いの最高の場である日曜日の「ミサ聖祭」を選ぶか、それとも原則としてスポーツの娯楽やクラブ活動を最優先にするか。山上垂訓（八幸）の実践に励むか、それともそれを無視するか。唯一神の御言葉、特にキリストの教行証を記した新約聖書と正伝キリスト教の教理を信行するか、それとも「新時代」他のペてんの預言者、霊媒師、その信奉者、何の役に立たない「超能力者」や占い師の呪詛会、神懸り会や交霊会中に受けた反キリスト教的戯言を信行するか。ここに「中道」はない。

真の宗教、特に正伝キリスト教を蔑視する者、被造物を「神」と見なし崇拜する者、死んだ兇悪人を英霊視し拜む者、自己本位的な私利私欲を人生の正道とする者、復讐を煽る者、娯楽や秘伝神知を注入する秘儀を通じて「人間らしい」幸せと無辺際知の取得を確約する者達は人権の保護者、個人の自由と尊厳の見方および最前線進歩の推進者として『羊の衣を着けて来るが〔本心の〕内は欲深い狼である。〔彼らの実生活とその〕実を見れば、彼らの正体が解る』。（マテオ、7.15-16）。それらのことについてキリストはこう語っている。

『私は友人であるあなた達に言う。体を殺してもそれ以上何も出来ぬ人々を恐れるな。あなた達の恐れねばならぬのは誰であるかを教えよう。殺した後ゲヘナ〔永遠の苦獄〕に投げ入れる権威あるお方を恐れよ。私は言う。そうだ、そのお方を恐れよ』（ルカ、12.4-6；マテオ、10.28）。

『人々の前で私の見方だと宣言する者を私も又天にいます父〔なる神〕の前で見方だと宣言しよう。〔しかし、〕人々の前で私を否む者を私も又天にいます父の前で否む』（マテオ、10.32-33；ルカ、12.8-9）。

『（イエズスは）群衆と弟子達を集めて言われた、「私の後従おうと思うなら、自分〔の私利私欲〕を捨てて自らの十字架を背負って私に従え。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、私のため、福音のために自分の命を失う者はそれを救う。よし、全世界を儲けても自分の命〔の永福〕を失えばそれが何の役にたとう。…この罪深い不義の代〔つまり拒神拒愛の世俗社会〕において、私と私の言葉を恥じる者を人の子〔キリスト〕も又、御父と聖〔なる〕天使達の栄光を持つ

て〔世の完成の時、最後の公判に〕下り来るその時、恥じるだろう』（マルコ, 8. 34-38 ; マテオ, 16. 24-27 ; ルカ, 9. 23-27).

『人々の群れを見たイエズスは山に登って座られ、…こう教えられた。「心の貧しい〔我執のない〕人は幸せである、天の国は彼らのものである。柔和な人は幸せである、…悲しむ人は幸せである、彼らは慰めを受けるであろう。正義に飢え渴く人は幸せである、…憐れみ深い人は幸せである、彼らも憐れみを受けるであろう。心の清い人は幸せである、彼らは神を見るであろう。平和のために励む人は幸せである、…正義のために迫害される人は幸せである、…私のために人々はあなた達を罵り、あるいは攻めあるいは数々の讒言さんげんを言われる時、あなた達は幸せである、喜びに喜び、あなた達は天において大きな報いを受けるであろう。…だが、富む者は災いである、あなた達はすで慰めを受けたから、今飽き足りている者は災いである、あなた達は飢えることになるだろうから、今笑う者は災いである、あなた達は泣き悲しむだろうから、皆から誉めそやされる時、あなた達は災いである。彼らの先祖は偽預言者に対してそうしたのだった』（マテオ, 5. 3-12 ; ルカ, 6. 20-26, 16. 19-31).

『イエズスは言われた、「金持ちが神の国に入るのは何と難しいことだろう。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易しい」。これを聞いた人々は「すると、救われるのはどんな人ですか」と尋ねた。イエズスは「人には出来ぬことも神はお出来になる」と答えた』（ルカ, 18. 24-27 ; マテオ, 19. 23-26 ; マルコ, 10. 23-27).

『恐れるな、小さな群れよ。あなた達に御国を下さるのは父〔なる神〕の御旨である。持ち物を売って施せ。自分のために古くならぬ財布を作り、尽きぬ宝を天に積み。そこには盗み人も近寄らず、誰にも食い荒らされぬ。あなた達の宝の有るところにはあなた達の心もそこにある』（ルカ, 12. 32-34 ; マテオ, 6. 19-21).

『〔永遠至福の〕命のパン〔糧〕は私である。…これは天から下るパンである。これを食べる者は死なぬ。私は天から下った生きるパンである。このパンを食べる者は永遠に生きる。私の与えるパンは世の命のためにわたされる私の肉〔躰〕である。…真に真に私は言う。人の子の肉を食べず、その血を飲まなければあなた達の中には〔永遠を通じて神福に参加する〕命がない。私の肉を食べ私の血を飲む者は永遠の命を有し、〔世の完成である〕終わりの日にその人々を私は復活させる』（ヨハネ, 6. 48-57).

『真に私は言う。人の子らにはすべてが赦される、罪も彼らが吐いたすべての冒瀆も。だが聖霊に対して冒瀆を吐く者は一人残らず永久に赦されず、永遠に消えぬ罪を犯すのだ』。イエズスはこう言われたのは、彼ら〔法律学者達他の聖職者〕がイエズスのことを「汚れた霊〔悪魔〕に憑れている」と言ったからである』（マルコ, 3. 28-30 ; マテオ, 12. 22-32 ; ルカ, 12. 10)⁽⁴⁸⁾。

キリストが我々に教示した「愛」(agape) を核とする生き方の中に、いわゆる「隣人愛」(「善きサマリア人」、ルカ, 10. 25-37) だけではなく、私達に害を加えた「罪人を赦す愛」(ルカ, 17. 3-4)、敵のために祈り「敵を赦す愛」(ルカ, 23. 34 ; マテオ, 5. 43-48 ; ルカ, 6. 27-36)、そして人を救うために自分の「命を惜しまない愛」(ヨハネ, 15. 12-15 ; マテオ, 26. 26-29) である⁽⁴⁹⁾。このような愛こそ、未

だ他の宗教や宗祖に見られない「新しい生き方の掟」であり、人類史上に例のない素晴らしい生き方の理想を示し、キリストの心とその無上無比で救済的な使命感を示現する。かくした「愛」を生きる誠実な努力こそ、キリスト教徒の生き方の公私的な心得であり、人究の最高目的である自他永福を得るための道であるはずである。キリストは全人類の罪を贖償する死の直前、最後の晩餐会の席で、自分の信奉者に求められる愛とその愛の実践がもたらす「世による憎しみ」、迫害、「親や兄妹等の裏切り」と神福参加の獲得についてこう語った。

『私は新しい掟を与える。「あなた達はお互いに愛し合え。私があなた達を愛したように、あなた達も互いに愛し合え。互いに愛し合うなら、それによって人は皆、あなた達が私の弟子であることを認めるであろう。…〔神である〕父が私を愛されるように、私もあなた達を愛して来た。私の愛に留まれ。私が父の掟を守り、その愛に留まったように、私の掟を守るなら、あなた達は私の愛に留まるだろう。…私を愛する者は私の〔教えた総ての〕言葉を守る。…私を愛さない人は私の言葉を守らぬ。…この世があなた達を憎むとしても、あなた達より先に私を憎んだことを忘れてはならぬ。あなた達がこの世の者ならこの世はあなた達を自分のものとして愛するだろう。しかし、あなた達はこの世の者ではない。…だからこの世はあなた達を憎む。…心を騒がせることはない。神を信じ、そして私をも信じよう。…私はあなた達のために場所を準備しに行く。あなた達を連れていくために帰って来る。私のいる所あなた達も来させたいからである』(ヨハネ, 13: 34-35, 15: 9-10, 18-21, 14: 23-24, 1-6)。

『〔世の終わりが〕起こる前に、あなた達は人々に捕えられ、迫害され、会堂と牢獄に引かれ、私の名のために、王と総督の前に訴えられる。それはあなた達が証を立てる機会となる。…又、あなた達は両親、兄妹、親族、友人達からさえも裏切られ、何人かは殺されるだろう。あなた達は私の名のために総ての人から憎まれる。…』(ルカ, 21: 12-19; マテオ, 24: 9-14; マルコ, 13: 9-13)⁽⁵⁰⁾。

キリストが説くところによると神は人間一人一人の名を呼んで永遠の至福参加へ招き、万人を一人残らず愛するだけではなく、罪を認め、悔い改め、誠意を持って罪悪を償う者を赦す慈悲深い御方である(マテオ, 18: 21-35; ルカ, 7: 36-50, 15: 11-32, 23: 34-43, 24: 44-49)⁽⁵¹⁾。しかし同時に、神は人が自ら選定し、生きた人間の諸行とその本心を各自の自己中心的な「眼」ではなく、神の無償恵愛を源泉とする普遍的な正義(秩序)と自然で必然的な因果法(自業自得)の「眼」で評価し、各自の善悪、その成果と本音に応じて一人一人の永遠禍福を判定する。よって、「クリスチャン」の名を名乗る総ての者は必ず救われるということが保証されていない。実は、真宗教の偽善的な上層部、言行不一致の宗教者、金儲けと不正に身を投じる宗教家、悪と妥協して真理を教えない教育者、社会的や経済的な弱者を搾取する者、似非のキリスト達、偽預言者達、誠実と慈悲心を無視して法律の形式を重視する信奉者や小さき者に躓きを与える宗教家が天国に入るのは極めて困難であることをキリスト自身も述べている。様々な折に彼は弟子たちとその信奉者に次のような警告を発する。

『〔神しか知らない「世の終わり」以前の時〕「そら、ここにキリスト〔がいる〕。あそこにキリストが〔いる〕』と言われても信じるな。偽キリストや偽預言者達が起こって、出来るものなら選ばれた人達をさえ惑わすほどの偉大なしるしや奇跡を見せるだろう。…ある人が「彼〔キ

リスト]は荒野にいる」と言っても〔捜しに〕出ていってはならぬ。「彼〔キリスト〕は奥の間にいる」と言っても信じるな。人の子の来臨は稲妻が東から西へと閃き渡るのに似ている』(マテオ, 24.23-28; マルコ, 13.21-27; ルカ, 21.25-28)。

『偽預言者を警戒せよ。彼らは羊の衣を着けて来るが、内は欲深い狼である。実を見れば彼らの正体が解る。いばらから葡萄を取り、あざみからいちじくを取る人はいない。すべてよい木はよい実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。よい木は悪い実をつけず、悪い木はよい実をつけられぬ。…人は実によってその人を知ることが出来る。私に向かって「主よ、主よ」と言う人が皆天の国に入るのではない、天にまします父のみ旨を果たした人が入る。その〔宇宙万物の完成と人類最後の公判の〕日多くの人私に向かって「主よ、主よ、私はあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪魔を追い出し、あなたの名によって不思議を行なったのではありませんか」と言うだろう。その時私ははっきりと言おう、「私は未だかつてあなた達を知ったことはない、悪を行なう者よ、私を離れ去れ!」(マテオ, 7.15-23; ルカ, 6.43-49)。

『(イエズスは多くの奇跡を見た町が悔い改めぬのを責められた。)「呪われよ、コロザイン。呪われよベトザイダ。お前達の中で行なった奇跡をティロやシドンで行なったら、彼らはずっと前から荒布を着、灰をかぶって悔い改めたことだろう。だから、〔最後の〕審判の日にはティロとシドンの方がお前達よりもおだやかな扱いを受けるだろう。カファルナウムよ、お前は天にまで上げられると思っているのか、いや、地獄まで落とされるだろう。〔そして弟子達にむかって、〕あなた達の言うことを聞く人は私の言うことを聞く人であり、あなた達を拒む人は私を拒む人である。そして、私を拒む人は私を送られた御方を拒む人である』(ルカ, 10.13-16; マテオ, 11.20-24)。

『呪われよ、偽善者の律法学士、ファリサイ人よ。あなた達は他人の前に天の国を閉ざし、自分も入らず、入ろうとする人が入るのも許さぬ。呪われよ、偽善者の律法学士、ファリサイ人よ。長い祈りを唱えて、寡婦の家を食い尽くすあなた達はもっと厳しい審判を受けるだろう。呪われよ、偽善者の律法学士、ファリサイ人よ。あなた達は一人の改宗者をつくるために海と陸を巡り、つくって後それを自分に倍するゲヘンナ〔地獄行き〕の子にする。…呪われよ、偽善者の律法学士、ファリサイ人よ。あなた達ははっか、ういきょう、いのんどの十分の一を納めながら、律法の中で一番重大な正義、慈悲と忠実を無視している。先のをも無視することなく、後のをこそ行なわねばならぬ。盲目の案内人よ、あなた達はこばえをこし出してらくだを飲み込む。呪われよ、偽善者の律法学士、ファリサイ人よ。あなた達は杯と鉢の外側を清めるが内側は強奪と放縦に満ちている。盲目のファリサイ人よ、先ず杯の内側を清めよ。…呪われよ、偽善者の律法学士、ファリサイ人よ。あなた達は白く塗った墓のようだ。外は奇麗であるが、内は死人の骨と様々な汚れに満ちている。外は他人の目に義人のように見えても、内は偽善と不義に満ちている。呪われよ、偽善者の律法学士、ファリサイ人よ、…蛇よ、まむし族よ、地獄の罰避けられると思うな』(マテオ, 23.13-15, 23-34)。

『律法学士よ、あなた達にも呪いあれ。あなた達は担いがたい荷を他人に負わせ、自分は指一本も荷に触れようとしない。』(ルカ, 11.46-47)⁽⁵²⁾。

3. 使徒教会による死と死後界の理解

正伝のキリスト教は人間一人一人の死苦および死後の禍福を人類の原罪性⁽⁵³⁾、神の無償恵愛を出発点とする救済計画、イエズス・キリストの贖罪的人筈、特にその死、復活と昇天の価値、個人の自由決行の善悪と責任及び「神しか知らない」現世の終末的完成の時に行なわれる公審判との関係において理解し、使徒の時代から一貫して教示している。復活したキリストの昇天後、使徒団を励まし、その信仰、つまり終生誠実で善き生き方を導き、初代の信仰共同体をまとめる役を任せられた使徒ペトロは、最初の説教の中でキリストの使命、その人筈の価値と全人類の救済における役割についてこう述べている。

『イスラエルの人々よ、聞きなさい。あなた達の知っている通り、神はイエズスによってあなた達の中で奇跡と不思議なしるしを行ないました。それによってナザレト人のイエズスを〔神は〕証明されました。神の普遍の御旨とその予知によって彼は死に渡されました。あなた達は彼を悪人の手によってはりつけにして殺したのです。だが神は死の束縛を解き、彼を甦らせました。彼は死の支配下にはとどまらない方でした。…太祖ダビデは…「彼（キリスト）は死者のところに捨て置かれず、その体は腐敗を知らなかった」という言葉でキリストの復活を預言して告げた。神が復活させられたのはそのイエズスであります。私達は皆そのことの証人です』(使徒行録、2・22-25, 31-35)⁽⁵⁴⁾。

有名なファリサイ人（旧約聖書学者）パウロはユダヤ教の最高権を握ったエルサレムの大司祭達から全権委任状をもってキリストの福音を宣教していた聖ステファノの石打ち刑の承認を初め、クリスチャン迫害の先頭に立ち、幼き共同体の抹消を人生の最大目標にしながらパレスティナとシリアに住んでいたキリスト教徒の弾圧に全力を尽くしていた。彼はある時に突然キリストに出会い、迫害の総指揮者からキリスト、その教えの大辯論家とキリスト教伝道の大先駆者となった。このパウロは自らの人生を変えた復活者キリストとの神秘的で衝撃的な出会いとその意義をこう語る。

『前に私はナザレト人イエズスという名に対して強く反対せねばならぬと考え、…司祭長達から権限を受け、多くの聖徒を牢に入れ、彼らが死刑に決められる時には有罪の票を投じ、…強いて冒涇を言わせ、怒り狂うあまりに外国の町まで彼らに迫害の手を伸ばしていました。ある時、司祭長達から任命と権限を受けてダマスコへ行きましたが、その途中真昼頃、王様、私と一緒にいた人々の回りに、太陽よりも輝かしい光が天から下りるのが見えました。私達は皆大地に倒れましたが、その時へブライ語で「サウロ、サウロ〔パウロの旧名〕、なぜ私を迫害するのか。…」という声が聞こえました。私が「主よ、あなたはどなたですか」と聞きますと、主は「私はあなたが迫害しているイエズスである。…私はあなたを救い出し、そして異邦人へ遣わそう。彼らの目を開かせ、闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、私への信仰によって罪の赦しを与え、清い人々と共に彼らに〔救いの〕遺産を受けさせるために」と仰せられました』(使徒行録、26・9-17, 9・1-9, 22・3-11; ガラツヤ人、1・12-17)⁽⁵⁵⁾。

使徒となったこのパウロは「人間の復活」に関する学問的な大問題と万代万人の心奥に潜んでいる疑念をしっかりと受けとめながら見事に解決している。彼によると、もし人間の復活が不可能であったならキリストも勿論復活しなかっただろう。そして、もしキリストが復活しなかったならクリスチャンの復活信仰、死後永禍の懸念、死後永福の希望と神の無償恵愛だけではなく、断悪進善の努力、愛神愛人の価値、そして、キリスト自身の宣教と十字架上の死も当然無意味であり、馬鹿げた迷信であり、荒唐無稽の虚説に等しいと述べている。さらに、我々にして観れば、もし死後に生前善悪の応報と公平で不偏の正義がなく、キリストの復活もでっちあげであるならばキリストもその信奉者も二千年に亘って全人類を瞞して来た愚昧の欺謾者に過ぎないことになる。又死後の応報を説き、キリストが復活して現在も生き、いつかは必ず全人類を裁くために再臨すると疑わずかたく信ずる正伝のキリスト教徒はこの上もない愚痴、覇権の貪欲と傲慢な連中の組織であるだけではなく、絶対的な神仏、宇宙の秩序とその普遍的な道理を歪曲し無視している社会であり、克服不可能な迷信を真理として敬う精神異常者の集団であると認めざるを得ない。しかし、もし新約聖書が伝えているようにキリストが唯一神の御子で世界唯一の贖罪主と救い主であって、本当に復活したのであれば、キリストとその福音に従って誠実に生きようと努め、現世を去る者達をこの上もない永遠慶福が待っているという事も認めざるを得ない。一方、キリストとその価値観を拒絶し、彼が示した「愛神愛人」の道は無視したり嘲ったりする者達を自然で必然的に永遠の禍苦が待っているということも、少しでも考える能力と良識のある者は認めざるを得ない。使徒パウロは上記の事柄の他に「死の一回性」、「復活」の意味と「復活した人の境遇」について次のように述べている。

『私は第一にあなた達に伝えたことは私自身受けたことである。即ち聖書に記されている通り、キリストは私達の罪のために死に、葬られ、聖書に従って三日目に甦り、ケファ〔ペトロの旧名〕に現れ、又11人に現れ、その後500人以上の兄弟〔つまり信仰における兄妹〕に同時に出現された。その中には死んだ者もあるが、殆どは今なお生きている。…最後には月足らずのような私にも出現されました。私は神の教会を迫害した者であって、使徒と呼ばれる値打ちのない、使徒の内でも最も小さな者である。しかし神の恩寵によって私は今の私となった。…キリストが死者の中から甦ったと宣教しているのにあなた達の中に死者の復活はないと言う人があるのはどうした訳か。死者の復活がないならキリストも復活しなかった。キリストが復活しなかったなら私達の宣教は虚しく、あなた達の信仰も虚しく、その上、私達は神の偽証人となる訳である。…死者が甦らない〔という現世の秩序は神によって創設された〕なら神は〔自ら設定した理法に逆らって〕キリストを甦らせなかった〔であろう〕。…キリストが復活しなかったならあなた達の信仰は虚しく、あなた達〔正伝キリスト教徒〕はまだ罪〔永遠の慶福を礙げる人類の原罪とその結果である諸悪の支配〕の中にいる。したがって、キリストにおいて死んだ人々も滅びるであろう。私達がキリストに希望をかけたのがこの世〔世俗的で世間的な栄利、富裕、権力、名声、放埒〕のためだけであるなら、あなた達は人の中で最も衰れな者である。しかし、そうではない。キリストは死者の中から復活し、死者〔復活〕の初穂となられた。…すべての人が〔人祖〕アダムによって死ぬように、すべての人はキリストによって生き返る。しかしそこに順序があり、先ずキリス

ト、次に、…そして〔世の〕終わりが来る。その時キリストは全ての権勢、能力、権力を倒し、父なる神に〔一切の〕国を渡される。…最後の敵として倒されるのは死である。…それは神が総ていおいてすべてとなるためである。…死者が全く復活しないのなら、なぜ死者のために洗礼を受けるのか〔自分の先祖を救うために人がクリスチャンになり、「愛神愛人」の道を歩んで生きること〕。…死者が復活しないなら「さあ、飲み食いしよう。明日は死ぬのだから」。しかし、思い誤るな、…酔いから覚めて正気になり、もう罪を犯すな。…ある人は尋ねるであろう、死者はどうして甦るのか、どんな体を持って甦るのかと。愚かな者よ、あなたの詩くもの〔善悪の行ない〕は先ず死なねば新たに生かされることはない。あなたの詩くものは後に生まれる体ではなく、…ただ〔自分の永遠禍福的な心身の〕種粒だけである。神はその種に〔恵愛の正義の〕思し召しのままに体を与え、各々の種に相応しい体を与えられる。総ての肉は同じ肉ではない。人類の肉体があり、…魚の肉体があり、…天上の体と地上の体がある。…太陽の輝き、月の輝き、…この星とあの星の輝きが違う。死者の復活もそうである。…動物的な体があるように霊の体もある。…私はこう宣言する、「血肉は神の国を継ぐことが出来ぬ。朽ちるものは朽ちぬものを継ぐことはない」と。…私達は皆、最後〔公審判〕のらっぱが鳴りわたる時、またたく間にたちまち変化するであろう。ラっぱはなり、死者は朽ちぬ者に甦り、私達は変化する。この朽ちる〔肉体を有する〕者達が朽ちぬ〔身体、「霊体」〕を着、この死ぬ者は不滅をまとわねばならぬ。…ともあれ、主イエズス・キリストによって私達に勝利を与え給う神に感謝しよう。それでは、愛する兄弟達よ、あなた達の苦勞が主〔キリスト〕によって虚しくならぬことをわきまえ、確固として揺らぐことなく、常に主〔がお示しになった「愛神愛人」〕の業を励み努めよう』（1コリント人、15. 3-58）⁽⁵⁶⁾。

使徒達を中心とする信仰共同体がキリストの全人甦、特に十字架上の死を全人類の原罪と諸悪の贖い、その罰の代価（生け贄）、神の正義の全う、人類に対する神の恵愛の最高表現および神の人間との新契約の永遠証印として理解する。そして、弟子達はキリストの名を恥とせず、その教えを生きる者の人甦、特に苦しみに救済的な価値を認める。さらに、神が自分とその御独り子を愛する者のために準備された栄福は我々の想像を絶すると主張する。使徒パウロと最初の教皇であった使徒ペトロはこれらの真理を次のように明示する。

『一人の人〔人祖アダム〕によって罪が世に入り、又罪によって死が世に入って全ての人々が罪を犯したので、死が全ての人に及んだように一人の人〔キリスト〕によって救いが行なわれた。…アダムと同じような罪を犯さなかった人々の上にも、…死が支配した。…つまり一人の罪によって有罪の判決が全ての人に及んだように一人の正義の業によって〔永福の〕命を与える義も全ての人に及んだ。…私達はキリストの死にあやかってキリストと共に植えつけられたのだから、その復活にもあやかるとであろう。…罪から開放された今、神の奴隷となって聖徳の実を結べば、その果は永遠〔に慶福的な〕の命である。罪の払う報酬は死である。しかし神の恵は主イエズス・キリストにおける永遠〔至福〕の命である』（ローマ人、5.12-6.23）。

『キリストは、…自分自身の血をもってただ一度だけで永遠の至聖所〔天国〕に入り、永遠の

贖いを為し遂げられた。…汚れのない御自分を神に捧げられたキリストの御血が、私達の良心を死の業から清め、…彼は新しい契約の仲立ちであって、前の契約〔アブラハムとの契約、ノアとの契約、イスラエルとの契約、万代聖哲との諸契約〕の時の違反を贖うために死なれた。…キリストは人の手で作られた聖所に入ったのではなく、天に入って今私達のために神の御顔の前に出られる。…人間が一度だけ死んでその後審判を受けると定められているが、こうしてキリストも又多くの人々の罪を負うためにただ一度捧げられ、自分を待ち望む者に救いをもたらそうとして、再び罪を負わずに〔最後の公審判の時に〕出現される。…キリストの御体のささげ物によって私達は聖とされた。キリストは〔人々の〕罪のために、ただ一つの〔自分の命の〕生け贄を捧げて、永遠に神の右に座り、御自分の足台として敵が足の下に置かれるのを待たれる』(ヘブライ人、9.13-10.13)。

『キリストは一度人々の罪のために死なれた。義人であったキリストは不正な者の身代わりとなり、私達を神に近づけるためにその御体に死を受け、霊において生かされた。…キリストは〔私達に永遠の命の慶福を得させるために死に打ち勝ち〕天に昇って神の右に座れる。…キリスト信者として苦しむならばそれを恥じず、むしろその名をもつ事によって神に栄光を帰せよ。…神の御旨に従って苦しむ者は善を行ないながら真実の御方である創造主に〔自分の〕靈魂を委ねよ』(1ペトロ、3.18-4.19)。

『今の時の苦しみは私達において現れるであろう光栄とは比較にならないと思う。…神がもし私達の味方なら、誰が私達に反対できようか。…誰が神の選ばれた者を訴えられようか。…誰がキリストの愛から私達を離れさせようか』(ローマ人、8.18-35)⁽⁵⁷⁾。

キリストが教示したように使徒達も「裁きの日」、「最後の時」、「主の日」や「怒りの日」と呼ばれる現世の終末と完成の時に、神は人間の生前善悪とその大小に応じて各自の死後永禍や永福を最終的に確定し、真愛の正義とその栄光を現わすと力説する。キリストを初め使徒達は主の日が『神しか知らない時』に突然訪れるとはっきり指摘する。その前に教会の内外で偽教師、偽預言者、極悪の者達と「偽神」でさえ出現し、「キリストの再臨が差し迫っている」と宣言し、超能力をもって奇跡と不思議を行う事によって多くの者、キリストの信奉者でさえ惑わされると述べている。使徒達、特に聖パウロ、聖ペトロと聖ヨハネは「良心の死」そして、結果として永福の「死」を招く罪悪を断ち、キリストとその教会との一致において愛神愛人の道に励み、偽教師に耳を貸さないように警めている。

『私達の国籍は天にあり、そこから〔再び〕来られる救世主イエズス・キリストを待っている。キリストは万物を支配下に置く力によって、私達の卑しい体を光栄の体に変えられるであろう』(1フィリッピ人、3.21)。

『怒りの日に…神は各々の業に従って報い、根気よく善業を行ないながら〔神の〕光栄と名誉と不滅を求める人々には永遠の生命〔の栄福〕を報いられる。真理に従わず不義に従う反逆者のためには怒りと憤りを返される。悪を行なって生きる者にはすべて、先ずユダヤ人にそしてギリシア人〔他の国民〕にも患難と苦悶があり、善を行なう者には…光栄と名誉と平和がある。神は

人を〔人種、国民や個人才能によって〕区別されないからである』(ローマ人, 2. 5-11).

『自分を欺いてはならない. 神を侮ってはならない. 人は肉から腐敗を刈り取り, 霊に蒔く人は霊から永遠の命〔の栄福〕を刈り取る』(ガラツヤ人, 6. 7-8).

『主の〔再臨の〕日は盗み人のように来るであろう. その日, 天は大音響と共に過ぎ去り, 万物は焼け崩れ, 地とその上にあるすべての業は焼尽きる. …だが私達は神の約束によって正義の住む新しい天と新しい地を待っている. …だから愛する者よ, これを期待して主のみ前に平和に又汚れなく汚点なく生きるように努めよう. …私達の愛する兄弟パウロも自分に与えられた知恵を持って, かつてあなた達に書き送った通りである. 彼はこの事柄に触れるすべての手紙の中で同じことを語っている』(2ペトロ, 3. 10-16).

『兄弟達よ, 主イエズス・キリストの再臨と私達が主と会うことについて, あなた達に尋ねたい. いわゆる霊の啓示や話や, そして私達から来たと言われる手紙によって主の〔再臨の〕日が迫ったと考え, 急に心を騒がせたり, 怯えたりするな. 誰が何をしても騙されるな. 神の聖所に座り, 自分を神として示し, 神と唱えられる者, 崇敬される者の上に自分を立てる反逆者として現れるまで, 主の〔再臨の〕日は来ない. …〔その日が訪れた〕時に悪の者が現れる. そして主イエズスは御口の息でその者を殺し, 来臨の輝きを持って滅ぼされる. 悪の者はサタンの力をもって現れ, 力としるしと偽りの不思議をすべて行ない, 又救いに至る真理へ愛を受けなかった滅びる者のために不義の惑わしをするであろう. …こうして彼らは偽りを信じるようになる. …だが, 主に愛されている兄妹達よ, 私達はあなた達について絶えず神に感謝している』(2テサロニケ人, 2. 1-13)⁽⁵⁸⁾.

キリストが示した「御子の全権」(マテオ, 28. 18-20), 「愛神愛人の生き方」(マルコ, 12. 28-31; マテオ, 25. 31-46; ヨハネ, 13. 30-35 等), 「山上の垂訓」(マテオ, 5. 2-12 等), 「神とマンモン」(マテオ, 6. 24 等), 「御子の公認と否認」(マテオ, 10. 32-33 等), 「聖霊冒瀆罪」(マルコ, 3. 28-30 等), 「永命のパン」(ヨハネ, 6. 48-52 等), 「偽善者の不幸」(ルカ, 11. 46-48 等), 「最後公審判」(マテオ, 25. 31-46 等), 「天国と地獄」(マテオ, 25. 31-46 等), 「新しい掟」(ヨハネ, 13. 34-35) と「宣教使命と救いの根本条件」(マルコ, 16. 16; マテオ, 28. 16-20; ヨハネ, 6. 35-58, 11. 26, 14. 1-6, 15. 11-17, 21. 15-17) の教理を軸に使徒達は当時だけではなく, 万代万民のクリスチャンと高い教育および文明進歩を誇るヨーロッパ人, アジア人, 南北のアメリカ人, アフリカ人他の総ての人々に唯一神とその啓示探究の道義的な義務, 善悪の禍福的応報と死後の責任について時と現状に応じて教説する. これらの文を読むと, 現代の東西先進国とその俗界有識者が自慢げに主張する自国損益の最優先主義と自己本位主義の美德, 聡明な国民の私利私欲の絶対化, それらの価値が生み出している俗世界の自然で必然的な動物化とキリスト教の正伝を真面目に生きようとする人々が置かれている現実の風景が見事に描写されていると思う. 使徒パウロはこう述べている.

『実に神の怒りは真理を不正のとりことする人々の全ての不敬と不義に対して天から現わされる. 神について知り得ることは彼らにとっても明白だからである. …神の不可見性, すなわちその永遠の力と神性は世の創造の時以来, その御業について考える人にとって見えるものである.

従って彼らは言い逃れが出来ない。彼らは神を知りながらこれを神として崇めず、感謝しなかったからである。…彼らは自らを知者と称して愚かな者となり、不朽の神の栄光を朽ち果てる人間、鳥、獣、這う物に似た形に変えた。…そこで神は彼らをその心の欲に任せ、互いにその身を辱める淫乱にわたされた。彼らは神の真理を偽りに変え、創造主の代わりに被造物を拝み、それを尊んだ。…〔彼らの社会の〕女たちは自然の関係を自然に悖った関係に変え、男も又女との自然の関係を捨てて、互いに情欲を燃やし、男は男と汚らわしいことを行なって、その迷いに値する報いをその身に受けた。また彼らは神を深く知ろうとしなかったので神は彼らの邪な心のままに不当なことを行うにまかせられた。彼らはすべての不正、罪悪、貪欲、悪意、憎悪、殺害、争乱、狡猾、悪念に満ちる者であり、誇る者、悪口する者、神を憎む者、暴力を用いる者、高ぶる者、自慢する者、悪事に巧みな者、親に逆らう者、愚かな者、不誠実な者、情けのない者、憐れみを知らない者である。これらを行う者は〔禍の〕死に当たるという神の定めを知らないから、彼らはそれを行うばかりではなく、それを行う人々に賛成する。…神は各々の業に従って報い、根気よく善業を行ないながら光栄と名誉と不滅を求める人々には永遠の生命〔の栄福〕を報いられる。真理に従わず不義に従う反逆者のためには怒りと憤りを返される。悪を行なって生きる者にはすべて、先ずユダヤ人に、そしてギリシア人〔他の国民〕にも患難と苦悶があり、善を行なう者には…〔永遠の〕光栄と名誉と平和がある』(ローマ人, 1.18-2.11)。

『あなた達が神の〔恵愛の〕聖所であり、神の霊はその中に住みたもうことを知らないのか。神の聖所を壊す者があれば神は彼を壊される。神の住まいは聖なるものである。…不正な人は神の国を継げない〔つまり神福参加が出来ない〕ことを知らないのか。思い誤るな。淫行する人も、偶像崇拜者も、姦通する人も、男娼も、男色する人も、泥棒も、貪欲な人も、讒言する者、酒飲み、奪略する者、神の国を継がぬ。…「私なら何をしてもよい」と言う人がいるかもしれぬ。けれども、「全てがためになる」とは言えぬ。…食べ物は腹のため、腹は食べ物のためなのか。…あなた達の体はキリストの肢体であることを知らないのか。…キリストの肢体をとって娼婦の肢体にして善かろうか。…真にあなた達は高値で買〔救〕われた者である。その体をもって神に光栄を帰せよ』(1コリント人, 6.9-20)⁽⁵⁹⁾。

使徒達時代のローマとギリシア等の世界の多神教の人々だけではなく、多くの現代宗教、特にイスラム教・ヒンズー教・プロテスタント・ロシア正教・神道と仏教の過激派、無宗教と反宗教の「偉人たち」、そして、世界の経済・軍事と政治、取り分け、米国・イギリス・日本・スイス・フランス・ドイツ・ロシアと中華の権力者と金持ちは『私なら何をしてもよい』、つまり、世界の他国、その資源と富が彼らの私利私欲を充たすため、そして、自由、人権と権力が彼らの身内とその社会の自己本位的な生活水準を確保するためにある、と勘違いしているのである。彼らの殆どは事実上で『神の真理を偽りに変え、創造主の代わりに被造物を拝み、それを尊ぶ。…彼らは神の聖所に座り、自分を神として示し、神と唱えられる者』として振舞うのである。高い教育を受け、世界一流の大学に留学し、『自らを知者と称する彼らは(自らの現行の責任の)言い逃れが出来ない』。何故かと言うと、唯一神、神の無償恵愛とその救いを知る能力と機会が沢山あるにも拘わらず、神の御

独り子が示す愛神愛人の道を求めないばかりではなく、それを嘲たり、頑固に拒否し続けたりするのである。更に、多くの先進国の上流階級、娯楽、映画、芸能、スポーツ、政経、メーソン、新興宗教、新時代運動の信奉者とその宗教界、特に豊裕層の世界を見ると『神は彼らをその心の欲に任せ、…邪な心のままに不当なことを行うに任せられた。彼らは互いにその身を辱める淫乱〔つまり墮落〕にわたされた』。彼らの社会の多くの『女たちは…男も…自然の関係を捨てて、互いに情欲を燃やし、汚らわしいことを行って、その迷いに値する報いをその身に受けている。…彼らはすべての不正、…争乱（等に満ち）、…情けのない者…である』と言えるのではないだろうか。

使徒パウロは公私的な良心の「死」、そして、その結果として永遠慶福の破壊（死）『に至る罪を犯している者』たちが愛神愛人の正道に立ち返らなければ、『神の国に入らない』と明言する。現に今生きている多くの人々の良心が既に死んでいる。

先ほど列挙した政経と娯楽等の権力者と権威者がキリストの言葉、彼の「贖罪的な死、復活と昇天」を嘲笑したり、軽視したりしているのを見ると、これらの者たちが『死者の中から甦って〔かれらを戒めたとして〕も、彼らは聞き入れない』（ルカ、16²⁸⁻³¹）であろうが、個人、国家や宗教団体の認否認と関係なく、神は先ず死直後に個人的に、そして、最後の公審判の時に万代万人の前で各人に『各々の業に従って報いられる』。

我々も『自分を欺いてはならない、神〔とその御独り子であるイエズス・キリスト〕を侮ってはならない。〔肉〕において蒔く〕人は肉から腐敗を刈り取り、霊に蒔く人は霊から永遠の命〔の栄福〕を刈り取る』という使徒パウロの言葉を真摯に受けとめ、愛神愛人の正道に一層励むことは永遠に後悔しない、この上のない安心感を得させる最高の「自愛」の表現ではないだろうか。

< 続く >

註

正伝キリスト教で「神」とは、多神教や仏教とそれらの俗人が連想する「神」という現象界的な存在ではなく、「霊知、自由意志、善美、幸福と恵愛等のきわまりない徳力を本有する、唯一絶対で非現象界的な（在りとあらゆる宇宙万有を絶する）存在者」を意味するのである。

(33) 『聖書』（新約篇）、バルバ口訳、pp.96-97, 59, 17, 100, 156.

(34) Ibid., pp.30-31, 34.

(35) Ibid., pp.45, 76, 126.

(36) Ibid., pp.76-77, 45-46, 126-127, 167-168.

(37) Ibid., p.47.

(38) Ibid., pp.129, 48-49, 78-79, 170-171.

(39) Ibid., pp.130-131, 50-51, 80, 172-175.

(40) Ibid., pp.49-50.

(41) Ibid., pp.50, 80, 173, 177, 131. 聖書のグルガタ訳（ラテン語）と英語のジェルサレム・バイブルはマルコによる福音書16章15-17節を下記のごとく訳す。

[a] “Qui crediderit et baptizatus fuerit salvatus erit; qui vero non crediderit condemnabitur [信じて洗礼を受ける者は救われる、しかし信じない者は永遠禍苦の刑を宣告されるであろう]” (‘Vulgata Bible’, vol.2, p.1605).

[b] “He who believes and is baptized will be saved; he who does not believe will be condemned [信じて洗礼を受ける者は救われる、しかし信じない者は永遠禍苦の刑を宣告されるであろう]” (‘Jerusalem Bible’, NT, p.89).

マテオが著した福音書によると、昇天の直前にキリストが弟子達にこう言った。『私には天と地の一切の権威が与えられている。行け、諸国の民に教え、聖父と聖子と聖霊の名によって洗礼を授け、私が命じたことを全て守るように教えよ。私は世の終わりまで常にお前達と共にいる』（28章18-20節。Ibid., p.50）。さらに、ルカによる福音書は、キリストの昇天直前

の言葉をこう書き著している。『「キリストは苦しみを受けて、三日目の死者の中から甦り、その御名によってエルサレムを始め、諸国の民に罪の赦しを得させる悔い改めが述べ伝えられると記されている。あなた達はこれらのことの証人である。私は父の約束されたものをあなた達に送る。あなた達は上からの力を着せられるまで〔エルサレム〕市に留まれ」と〔イエズスは〕言われた。それから彼らをベタニアに連れて行き、手を上げて祝福された。祝福しておられる内に彼らを離れ、天に上げられた。弟子達はイエズスを拝み、たいそう喜んでエルサレムに帰り、絶えず神殿で神を誉め讃えたのである』(24章46-53節。Ibid., p.131)。

(42) Ibid., pp.139, 142-143, 162, 156, 45, 76, 126, 50, 80.

(43) Ibid., p.109.

(44) Ibid., p.42.

(45) Ibid., pp.50, 80, 142, 73, 38, 105.

(46) Ibid., p.116.

(47) Ibid., pp.45, 14, 37, 113, 25.

(48) Ibid., pp.108, 19, 65, 29, 66, 10-11, 97, 116, 13, 119, 33, 68, 109, 145, 56, 22.

(49) Ibid., pp.105, 117, 129, 12, 95, 163, 45.

(50) Ibid., pp.161, 163-164, 162, 124, 41, 75.

(51) Ibid., pp.32, 97-98, 114-115, 129, 131.

(52) Ibid., pp.41, 74, 125, 14, 95-96, 104, 21, 39-40, 107.

(53) 私著『人葬の禍福的運命』の四篇、特に(2)三位一体的唯一神の人格的肖像、(3)人類始祖の最初の境遇と神の特別な恩寵、(4)始祖の試行錯誤的「自己神格化」と人類の「原罪性」、(5)人間、その魂魄、本然性質とその禍福的性向という項目を参照。

(54) 『聖書』(新約篇), p.179.

(55) Ibid., pp.222-223, 190-191, 216, 288.

(56) Ibid., pp.270-272.

(57) Ibid., pp.238-239, 342-343, 363-364, 241-242. さらに『人葬の禍福的運命』の四、特に(3)と(4)の項目を参照。

(58) Ibid., pp.305, 234, 294, 368, 312-313.

(59) Ibid., pp.233-234, 256, 259-260.

(2008年12月3日 受理)